第一席

和敬点と私

みよし市立三好丘中学校３年（愛知県）
音瀬 樹里

私は茶道に出会えたおかげで、大切なものを得ることができた。

最後のお茶会で、和敬点を披露することになった。そのことを先生から聞いた時は、難しそうだが、自分にできるのだろうかとかなり不安に感じた。いざ稽古が始まると、手順が複雑で、何度やっても覚えられなかった。上手くできない自分が嫌になり、勝手に追い詰められ、かなり焦った。そのような感情がお点前にも表れてしまい、先生に「落ちついて」と何度も注意された。それが悔しかった私は、自分のお点前に自信が持てるように繰り返し稽古した。だが都合が合わず、最後に稽古できたのは本番５日前だった。

お茶会当日。その日は朝からずっと緊張していた。お呼ばれの直前、私は不安に押し潰されそうになっていた。そんな私を見て、半東をやってくれる友が、
「完璧にやろうって思わないで、最後までやり切るのを目標にしよう」。と言ってくれた。何気ない一言だったのかもしれないが、私はこの言葉で安心することができた。気負いすぎると、それがお点前にも表れてしまう。でも、今まで頑張って稽古してきたのだから大丈夫。友のおかげで、茶道は居やすい空間を客に提供することが大切なのだと再確認することができた。

本番は先生に助けられつつも、和敬点を最後までやり切ることができた。終わった後、無事に披露できた事に喜び、安堵した。先生からも「上手でしたよ」と言っていただけた。私は、とても大きな達成感を味わうことができた。その後、お茶会で感じたことを一人ひとりが言うことになった。自分のお点前に不安を感じていたこと、自分がこれまで茶道を頑張ってきたことに意味があるのだと思えたこと、周りの人達の支えが大きな励みになったこと。様々な感情が私の中で動いていた。半東をやってくれた友は、感想の最後に、「樹里とお点前ができて良かった」と伝えてくれた。私も、友と一緒に和敬点ができて良かったと心の底から思った。稽古では、私が苦手な部分を何度も繰り返し行った。そんな中、嫌な顔ひとつせず、ずっと付き合ってくれた。私が不安になっていた時も安心させてくれた。先生方も、他のみんなも同じだ。実際に活動をしている時は気付かなかったが、思い返してみると、様々な人から助けられていた部活動だった。

和敬点の「和敬」という言葉には、相手に対して敬意を表すという意味がある。私は茶道を通して、身の周りの人達から多く助けられていることを知った。これからも茶道を続けられるのかどうかは未定だが、周りの人達の大切さ、そして大切な人達を敬う事は忘れないでいたい。まずは、ずっと同じ部活で頑張ってきた仲間達に感謝を伝えたい。それは、次会った時に直接言おうと思う。